

# 全体としてみれば意義深いシンポジウム

— コーディネータとしての感想 —

研究参与・専修大学名誉教授 鶴田 俊正

## 1. 事前の準備が大変だったのではないか

私がコーディネータを担当した午前中のセッションは、前半、後半の2テーマからなり、前半のテーマ1は「経済・産業構造の変容と企業システム」の統一テーマで、発表者は日本側・専修大学経済学部宮寄晃臣教授、中国側・上海社会科学院経済研究所副所長周振華研究員であった。宮寄氏の報告テーマは「IT／グローバルイゼーションと企業システム」であり、周氏のテーマは「上海の経済発展と構造調整」であった。

後半のテーマ2は「大都市建設と再開発」の統一テーマで、発表者は日本側・専修大学文学部福島義和教授、中国側華東師範大学曾鋼教授であった。福島氏の報告テーマは「日本的ウオーターフロント開発の現実と課題—東京都市圏・川崎市を事例として」であり、曾氏のテーマは「上海市張江ハイテクパークと（南区）の発展計画と構想」であった。

コメンテータは中国側・上海改革発展委員会総合研究所閻加林副所長、日本側・専修大学経済学部平尾光司教授であった。

発表者の持ち時間は30分で9時15分から11時15分までの2時間が当てられ、コメントと討論には11時15分から12時15分までの1時間が割り当てられた。当日の報告・コメント・討論はすべて同時通訳で行われ、すべての報告者が30分という割り当て時間内で報告を終えられ、また、コメント・討論もフロアのご協力もあり全くスムーズに行われたために、予定時間内に午前中のセッションを終えることができた。報告者・コメンテータ・討論者のご協力に厚く感謝申し上げたい。

4人の報告者の報告要旨は別掲されているので、ここで改めて要旨を述べることは避け、主として午前中のセッションを中心にコーディネータとしての印象・感想を述べることにする。

日本側・中国側の発表者すべてが専門家として日頃研鑽を重ねている分野での報告であったので、大変専門性の高い、彫りの深い報告であったと思うし、また、コメンテータ、フロアからの発言も鋭いコメント・質問があり、全体としてみれば意義深いシンポジウムであったと思う。恐らく事前の準備に相当の時間を割き、万全を期してシンポジウムに臨まれたように思える。専修大学のスタッフの方々は何回となく中国に渡られ社会科学院の担当者と事前の調整に当たられたのではないかと推測している。準備に当たられた上海社会科学院ならびに専修大学社会科学研究所のスタッフの方々に心から敬意を表したいと思う。

## 2. 全体的な視点を重視することが必要

私は中国の経済・社会の実状に疎い。それだけに周振華研究員の上海の産業構造に関する報告、曾鋼教授の上海市張江ハイテクパークの報告、盧漢龍院長・研究員の中国の社会格差・利益格差に関する報告、彭希哲教授の中国の高齢化社会と福祉制度についての報告は、すべてが実に新鮮で、多くの知見を得ることができ、感銘深く拝聴させていただいた。同時に、発展途上にある中国も日本に劣らず実に多くの難問を抱えているとの印象を深めた。このように一つ一つの報告は専門性も高く、彫りの深い内容であったが、テーマとテーマとの繋がり、巨視的観点からの全体を通しての中国経済像がもう一つはっきりしなかった。

たとえば、中国経済は1980年代半ば以降に極めて急速に発展していったが、マクロ的にみてどのような経済バランスの中でそれが実現したのか、経済発展を推進した原動力は何であったのか、この間にどのような構造変動が起こったのか、財政・金融政策はどのように展開されたのか、などなどマクロ経済学の視点からの分析と報告があったならば、「全体」と「個」とを関連づけながら、個々のテーマについての知見をもっと深めることができたのではないだろうか。

この論点は日本についても言えることであって、中国の研究者達は1990年代以降の日本経済について概略の知識はお持ちのことと思われるが、なぜあのような「長期停滞」が起こったのか、長期停滞下でどのような構造上の問題が発生し、それをどのように克服してきたのか、金融システム不安はどのようにして解消されたのか、構造改革はどこまで進んだのか、2002年以降の景気回復の要因は何だったのか、あるいは、長期停滞と一口に言われるが、この間にもトヨタ、キャノン、ホンダ、ヤマト運輸のように成長した企業群が少なからず存在しているのはなぜなのか、などなど日本の経験を理論的かつ具体的に論じることによって、中国に対して大きなメッセージを発信することができたのではないだろうか。

また、中国はアメリカ、ヨーロッパ、南米、アジア、中東、アフリカなどどのような国際分業を形成しながら経済的営みを行っているのか。あるいは、中国はアジアの中でどのような役割を果たしているのか。また、中国内には海外諸国からの直接投資は、中国社会に根付かずに「いいとこどり」だとして外資に対する否定的な見方が少なくないと聞く。国際分業という視点から、とくに日本の直接投資が中国の経済にどのように関わり、定着し、どのように経済発展に貢献してきたのか、その結果として日本と中国との貿易構造はどのように変わり、双方にどのような利益をもたらしているのだろうか。

そして中国と日本はどのような相互補完・依存関係のもとで経済的な結びつきを強化しているのであろうか。日本において「中国脅威論」が根強く存在しているだけに、日本と中国の比較優位構造をきっちり分析することは無用の感情論を抑えて、両国が理性的な交流を重ねていく上で極めて重要なことのように思われる。表層的な見方・考え方から日中の研究者が自由と

なり、真摯に交流を重ねていくためには、相互の経済活動を率直に評価していくことが重要なことと思う。

このような論点は、コメンテータ平尾氏のコメントとも重なり合っていると思う。平尾氏は構造変化の発生要因は、社会経済システムなどの国家システム、企業システム、金融システムなどトータルな視点から把握されるべきであり、また、中国の経済発展と日本構造変化はどのように関連し合っているのかを明らかにすべきではないか、といった趣旨の発言をされていたが、全く同感であった。

### 3. 議論を相対化して自説を展開する配慮を

日本側の報告も私とはパラダイムが異なる方々の報告が多かっただけに、こんな見方・評価があり得るのかと勉強することができた。とくに宮寄氏は日本経済・産業の国際的な優位性となっていた日本的経営・日本の生産システムの特徴について報告した後に、日本の生産システムは、近年のデジタル技術の深化・コンピュータネットワークの進展によってその優位性が失われつつあり、かつ日本企業のグローバルな事業展開が日本企業の強みを掘り崩す結果となっていると指摘された。

確かにこのような主張は日本国内でも決して少なくない。しかし同時に、トヨタ・キャノンをはじめとして日本的経営を経営の根幹に据えて国際社会の中での比較優位をより強固にしている企業群が存在しているのも事実であり、また、日本的経営の根幹をなす長期雇用の慣行と技術開発との関連をより重視する議論も併せ存在している。日本の経済社会全体を鳥瞰してさまざまな議論を相対化しながら自説を展開するという順序で報告が行われていたならば、中国の方々にもっと強いメッセージを発信できたのではないかとの印象を持った。

また、宮寄氏はさまざまな規制撤廃や商法改正に伴う株式持ち合いの解消、M&Aの急増がこの数年来の一連の不祥事をもたらしたと論じ、とくに労働市場での規制撤廃による雇用流動化が家族と企業に支えられてきた日本の福祉国家を深層より崩しつつあり、市場主義的な雇用システムとは異なった枠組みでの雇用機会の確保が重要と提案された。重要な指摘であるが、反面、規制撤廃は規制によって守られていた既得権益を崩し、結果として資源配分の非効率性や所得分配の不平等を改善する側面も併せ有しているともいえる。このような側面への目配りも必要であったように思えた。

私とは専攻を異にする地理学専攻の福島氏の報告を拝聴して「空間の経済学」と非常に近い議論の組み立て方をされるとの印象を持った。川崎臨海工業地帯が三層の構造となっていることはじめて知った。私は大学院のオープンリサーチのプロジェクトで川崎市の研究が行われていることを熟知しているので、何の抵抗感もなく報告を拝聴できたが、中国の方々にとって

は「なぜ川崎なのか」と疑問をもたれた方が少なからずおられたのではないかと思います。

日本の経済社会において川崎工業地帯がどのように形成され、歴史的にどのような役割を果たし、日本の地域社会の中でどのような特徴を有し、現在どのような課題を抱えているのかを概論的に説明し、それから本論に入っていくという手順を踏んだならば、中国の方々の理解をさらに深めることができたのではないかと印象を持った。

以上は私の率直な感想であるが、今回の社研プロジェクトに参加することが出来たことは、私にとって貴重な体験となったことを感謝の気持ちを込めて改めて述べさせて戴きたいと思う。上に述べた私のコメントは「無い物ねだり」の感がしないでもないが、経済学の立場からの私の印象であり、今後の参考にでもしていただけたらと念じて述べたものである。

#### 4. 言葉の壁を乗り越える工夫を

最後に、中国とのディスカッションは言葉の壁が実に大きいと実感した。同時通訳は一見するとスマートだし、議論を効率よく展開する上では理想的な型式であるが、通訳者が専門用語をどの程度理解しているかによって必ずしも理想的な形にはならないこともあり得る。日本語と中国語の両方を理解している中国からの留学生によると、必ずしも正確に訳されていない場合が多々あったと聞く。そのために議論が噛み合わないことがままあったのではないだろうか。

これを避けるためには事前にフルペーパーを作成し、印刷して参加者全員に事前に配布しておき、当日はプレゼンテーションを10分程度で終わる（ディスカッションに十分な時間を確保するために）ことのできる要約版を事前に通訳者に渡しておき、完全に意志が通じるようにしておくべきではないだろうか。また、一つの報告には必ず相手国側のコメントをつけて議論に深みを持たせる工夫が必要であろう。私は国際的なシンポジウムを何回となく体験しているが、このような形式をとってさえすれば、完全とはいかないまでも結構正確にお互いの主張を相手に伝え、議論を深めることができたように思える。国際シンポジウムのあり方をさらに研究することが必要であろう。

以上